

沼津市

明治史料館通信

1999. 1. 25 (季刊 年4回発行) Vol.14 No.4 通巻第56号



紙芝居「少国民部隊」
(佐藤友哉氏所蔵)

紙芝居 少国民部隊

ぬまづ近代史点描 ③⑨

昭和十七年（一九四二）三月十二日付で、沼津市第四国民学校初等科六年生佐藤友哉君は静岡県学務部長名の「軍第九二号」「軍事援護ニ関スル作文並紙芝居創作懸賞募集二関スル件」という通知を受け取った。応募した紙芝居が審査の結果入選したという内容だった。そして、同年四月五日付でその作品は印刷物として発行されたのである。発行元は静岡県軍事援護課・恩賜財団軍人援護会静岡県支部である。紙芝居は縦二十六センチ、横三十八・五センチ、全部で十九枚から成る。カラー印刷である。最後の一枚の裏面には奥付の他、「静岡県懸賞入選作 少国民部隊」「原作・原画沼津市第四国民学校初等科第六学年佐藤友哉」と、タイトル・作者名も印刷されている。そして、「これは、或る小さな町の隣組の人たち、大人も子供も、心を一つにして、応召軍人の家を助けて行つた美しいお話です」という冒頭の台詞もある。ストーリーは、出征した酒屋の主人の妻と二人の子どもが、留守を守つ

て懸命に働き、小学校の教師・友達や近所の人たちもそれを温かく応援するというもの。父も戦場で手柄をたてて帰還し、ハッピーエンドとなる。そして結びの台詞は、「地球上に大日本の名前が、ピカ／＼光つてゐます。国が小さいけれど、かういふ国民が集つてゐるので」。

江原素六とその周辺③

高橋由一画 中島三郎助肖像に関する手紙

江原素六に宛てた手紙の中に正木直彦の大正三年（一九一四）のものがある（江原文書P1a—596）。以下がその全文である（適宜読点を付した）。

拝啓益御安静奉賀候、陳者此程明治初年油絵大家として有名なりし故高橋由一先生之娘にて故柳源吉氏之未亡人ニ面会之折、同女之被申候様、旧幕末ころ中島三郎助様より亡父ニ御自身之肖像御依頼相成、出来之上御渡可被下苦之処ニ戦争始まり中島氏ハ箱館五稜郭にて戦死なるれ候為ニその肖像ハ渡るへき方も

この紙芝居がどれほどの部数印刷され、どこに配布されたのかはわからないが、現在、佐藤友哉さんご本人の手元にはそのうちの一枚が大切に保存されている。戦時下の教育や子どもについて考える貴重な実物史料であることには間違いないが、作者にとつてはかけがえのない宝物であろう。



正木直彦



中島三郎助
（『同方会誌』より）

有之、御安置被下候、先ハ右御依頼申上候、草々頓首
大正三年十月八日

正木直彦

江原素六様

侍曹

正木直彦（一八六一—一九四〇）は、帝国大学出の官僚で、明治三十四年（一九〇一）から昭和七年（一九三二）までの長きにわたって東京美術学校長をつとめた。大正八年帝国美術院幹事、昭和六年には同院長となり、美術教育や美術行政に大きな力を持った。

この手紙は、洋画家高橋由一（一八二八—一九四四）が描いた幕臣中島三郎助の肖像画を中島の子孫に渡したいので、その所在を教えたいという内容である。高橋は幕府の蕃書調所画学局で油絵を研究した近代洋画の先駆者として知られるが、すでに故人となつて

おり、その肖像画は娘の手元に残されていた。一方、高橋に肖像を注文した中島三郎助（一八一—一六九）は、浦賀奉行所の与力出身で長崎海軍伝習所に学び、幕府の軍艦操練所の教授になり、戊辰戦争では榎本武揚の脱走艦隊に加わり五稜郭の戦いで二人の息子とともに戦死した人である。高橋は中島の戦死により肖像画を渡すことができなかったらしい。

それから半世紀近くが経過した頃、美術界の有力者である正木は、高橋の娘から中島の子孫を捜すことを頼まれた。榎本武揚が健在であれば彼に聞くところだが、その榎本も既に亡くなつていた。困つた正木は、そこで、同じ旧幕臣の長老である江原素六に問い合わせの手紙を出したということである。江原は当時旧幕臣とその子孫の親睦団体である同方会の会長であり、

正木はそれを見込んだのかもしれない。

さて、この手紙をもらった江原がどのように対処したのかはわからない。しかし結果として肖像画は中島の子孫の手元にたどり着い

シリーズ

沼津兵学校とその人材

52

高藤三郎 — 伊豆の農民から旗本・大蔵官僚へ —

沼津兵学校の管理部門である静岡藩軍事掛の幹部の一人に高藤三郎(なかとうさぶ)がいた。彼は伊豆国君沢郡戸田村(現田方郡戸田村)の豪農勝呂家に生まれた人であり、生まれながらの武士ではない。

文政十一年(一八二八)十二月八日に生まれた彼は、勝呂弥三兵衛敬忠(ゆきただ)の七男である。父敬忠は沼津藩領である村の名主をつとめると同時に紀州藩の石切出御用もつとめた。七歳年長の兄為忠(犀助)・弥三兵衛・勝之丞・務)も名主・取締役を歴任、幕末戸田村でのロシア人による洋式帆船戸田号建造に尽力している。

最初の名は鍵蔵、後に乾吾と改めた。どのような縁故があったの

たようである。立派な額縁に収められ、裏面に「天竺堂高橋由一所写」と墨書されたその肖像画は、中島家に現存することである(中島義生編『中島三郎助文書』一九九六年、口絵)。

か、嘉永二年(一八四九)駿府町奉行三好大膳に仕官し、逸郎と改名、諱を忠典とした。さらに、安政二年(一八五五)二月、江戸本所に住む幕府御徒高藤三郎の養子に入り、高藤之進と名乗ることになった。時に二十八歳だった。

伊豆の農家に生まれ、武士となつた彼は、単に身分の壁を飛び越えただけで満足したわけではなかった。その後は幕臣としての出世の階段を登り続けるのである。安政四年(一八五七)八月、箱館奉行下調役公事方兼帯を仰せ付けられ、文久元年(一八六一)十二月には御徒目付に転じた。慶応元年(一八六五)十一月二日神奈川奉行支配調役、同三年九月四日大坂

町奉行支配組頭と進み、永々御目見以上と心得るべき旨が申し渡された。御家人から旗本への昇進である。同四年正月には「格別出精相勤候」につき布衣(六位に相当する高い家格)を仰せ付けられている。その経歴からすると実務能力に長けた人だったと考えられる。彼は出世の都度、故郷の父や兄・甥に手紙で報告している。たとえば以下のようである(勝呂安家文書)。

一筆啓上仕候、然者私儀、一昨廿八日堀出雲守殿御差函ニ付、御城江罷出候処、御徒目付被 仰付旨、於焼火之間、若年寄衆御列座御同人被仰渡、難有仕合奉存候、右御吹聴申上度、如斯御座候、恐惶謹言

高藤之進忠典(花押)

十二月晦日

勝呂弥三兵衛様

余人々御中



晩年の高藤三郎(右から3人目)と三田葆光(信の父、5人目)
(三田佳平氏所蔵)



高藤三郎(左)
(高 恵一郎氏所蔵)



兄と甥に布衣昇進を知らせる手紙（勝呂 安氏所蔵）

しかし、そんな出世街道も行き止まりとなる。幕府の崩壊である。慶応四年正月、鳥羽・伏見の敗戦を大坂で迎え、母・妻・息子・娘と家来・下女数名を引き連れて和歌山経由で脱出、同月下旬には船路郷里である戸田村へもどった。実家では思いもかけない幕府瓦解を嘆き合ったに違いない。その後家族を実家に預け江戸へ帰った彼は、大坂町奉行所の廃止により勤仕並寄合を命じられる。そして駿河への移住。幸いにも

郷里に近い沼津が移住地だった。

陸軍生育方として沼津商社会所の設立などに携わった後、軍事俗務方頭取となり沼津兵学校の管理を担当した。沼津駐在の軍事掛幹部の席次としては、トップの服部綾雄から数えて八番目になり、静岡藩でもその能力が高く評価されていたことがわかる。この頃、藤之進を藤三郎と改めている。

しかし静岡藩での仕事は長くなかった。明治政府からの徵命が下り上京したのである。明治三年（一八七〇）五月九日、民部省への出頭を命じられ、六月二十三日には同省通商権大祐に任命された。その後大蔵省に転じ出納中属を経て、四年（一八七一）十一月九日には出納権大属となっている。以後は同省に勤続、明治十四年（一八八一）七月十八日に大蔵少書記官となり、九月十二日には従六位に叙せられた。この頃も旧幕時代と同様、実家への手紙による報告を欠かしていない。たとえば、

一筆啓上仕候、然者私儀、去ル十八日被任大蔵少書記官、難有奉存候、右御吹聴申上候、恐惶

謹言

明治十四年七月廿日

高藤三郎

勝呂務様

勝呂弥三兵衛様

といった具合である。ちなみに右の弥三兵衛とは甥の悦忠のこと。その後の詳しい経歴については未調査である。明治維新を挟んで立身を成し遂げ、近代国家形成の一端を担った彼は、明治四十二年（一九〇九）一月二十五日に亡くなった。戒名は本境院殿逸郎日普居士。

藤三郎の後、高家は息子の辰、孫娘の婿明八と継がれていった。明八は静岡県田方郡函南村の素封家仁田大八郎（小三郎）の子である。また、藤三郎の長女唯の婿には沼津兵学校資業生出身で日本銀行幹事をつとめた三田佑ただしがなっている。

お知らせ欄

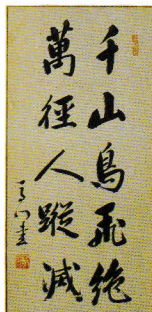
◎企画展「書にみる沼津の人物」の開催

沼津に関係のある近世・近代の人物の書幅・扁額・色紙・短冊・屏風などを集めて展示しています。沼津藩主・沼津藩士・僧侶・歌人・俳人・詩人・沼津兵学校出身者の墨蹟約七十点です。彼らが織りなす沼津の豊かな文化風土を知っていただければと思います。

期間…98年12月20日（日）から99年2月28日（日）まで

会場…3階北側展示室

図録…『書にみる沼津の人物』、42頁、頒価五〇〇円



寺屋角の鱗尾西門東 萬徑人蹤滅

史料館は

タイムカプセル

史料を

未来に伝えます

沼津市明治史料館通信 第56号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410-0051 沼津市西熊堂三七一―一
電話 〇五五九―二三三三三三
FAX 〇五五九―二五三三〇一八